

## 多読教材を用いた授業の一可能性

吉野 美智子

多読授業とは

外国語教育において、精読(intensive reading)に相対するものとして、素早く多数のテキストを読むこととして最初に多読(extensive reading)という用語を用いたのは Harold Palmer である。<sup>1</sup>以降、大量のテキストを読む多読は世界各地で行われ、リーディング、リスニング、ライティング等での改善が報告されている。<sup>2</sup>また大学でのリメディアル授業の英語では英語を苦手とする学生が、多読授業で平易で多彩な多読教材を大量に読むことで、飛躍的に英語力が改善されている。<sup>3</sup>

筆者が関西大学で平均 40 人のクラスで多読授業を行った時、学生は授業外で各自が選んだ多読教材を一定数読むことが成績配分に組み込まれ、多読が必須になるようにされていた。使用された本は Oxford, Cambridge, Macmillan, Longman, Heinemann, Scholastic といった海外の出版社のもので、レベルも Oxford Bookworms の starter といった、各出版社の一番易しいものから、難易度最高レベルのものまでが揃っていた。後にはイギリスで児童が学習に用いる Oxford Reading Tree などのシリーズも加わった。図書は当初教員が各クラスに運んでいたが、後に図書館等が管理することになり、学生は授業外でも自由に貸し出しが可能になった。

多読での成績配分は 30% に設定された。求められる読書量は春学期では導入時点であるため、400 ページ以上、秋学期は 600 ページ以上であった。春学期 400 ページ以上、秋学期 600 ページ以上で 30% になり、春 300 ページ以上、秋 500 ページ以上で 20%、春 200 ページ以上、秋 400 ページ以上で 10%、各学期ともそれ以下では 0% であった。それ以上読んだ場合は若干の加点があった。当時、『ハリー・ポッター』シリーズが映画化されたこともあり、原作を英語で読みたい、という学生もいたが、

すでに日本語訳もされていることもあり、英語図書を読んでもらうことを確実にするため、春、秋共にそれぞれ 400 ページ、600 ページ分は多読図書で読むことが要求され、原書を読んだ場合はそれ以降のページ数に組み込まれることになった。

多読図書は本のレベルが多岐にわたり、ある程度の実力がついた学生には積極的に上のレベルの本に挑戦してもらうため、レベルの指標になる Head words が 1100 以上の本を読んだ場合には最大 1.5 倍をページ数にかけて加点するなどの対応策が取られた。

必須ページ数は毎週読んでいれば達成できる量で、秋学期に到達ページ数は増えるものの、夏休み期間に継続して読書してもらうことが意図されていた。数年間の授業を通して、30% を取得する読書量に達しない学生は春学期ではクラスに数名で、秋学期は少し増えたものの、大多数の学生は 30% に達していた。

学生の読書を管理するのに Book Report、Reading Log が用いられた。雛形もすでに大学側によって、用意されており、各教員によるアレンジも可能であった。学生は一冊毎に Book Report を教員に提出する。Book Report は題名、ページ数、レベル、累計読書ページ数、読書にかかった日数、そしてあらすじ、感想などが求められる。提出された Book Report は各学生が行なっている読書について、レベル、日数などから教員がアドバイスをを行う資料となった。Reading Log はこちらも本を読む毎に題名、日時、ページ数を記入していくもので、教員が読書ページ数を一括確認する際に提出することになっていた

この多読授業では読書ページ数が一定数に達していないと単位が取得できない、また読書ページ数が多いほど多読での点数配分が取れる為、少数の難易度の高い本によってページ数を確保しようとする学生がいた。多読は継続して読むことが必要なので、このやり方

<sup>1</sup> リチャード・R・デイ、ジュリアン・バンフォード（荒牧和子、池田庸子、上岡サト子、川畑彰、北風文子、内藤満、福屋利信、松本真治、吉村俊子、渡邊慶子訳）『多読で学ぶ英語—楽しいリーディングへの招待』（東京：松柏社、2007年）6ページ。

<sup>2</sup> リチャード・R・デイ、前掲注(1)、45ページ。

<sup>3</sup> Atsuko Takase and Kyoko Otsuki, "The Impact of Extensive Reading on Remedial Students," (『教養・外国語教育センター紀要』2巻1号、2011年) 343ページ。

は本末転倒であり、また往々にして読んでいる本の内容を理解しないまま、最後までとりあえず目を通しただけ、ということになっていた。それが如実にわかるのが **Book Report** で、書かれている内容が曖昧だったり導入のみだったりした場合、または学生のレベルから本の難易度が高過ぎる場合は内容についての質問をし、答えられない場合はその本の読書ページは無効にする、などの処置ができた。また映画化された原作についての **Book Report** で、本とは内容が異なる映画の粗筋を書く者、インターネットのサイト等にある感想を書く者がいるので注意が必要ではあったが、次第に学生が読む楽しさを覚えていくのがはっきりと確認できたのもこの **Book Report** を通してであった。

多読自体は授業外に自習という形で行うため、授業では別テキストを用いての授業で、テキスト、授業内容は各教員に任せられていた。筆者は多読自習の負担を考慮し、授業では速読用のテキストを用いての授業を行った。また関西大学では一クラス分の **Oxford Bookworms** などの同一テキストと専任教員が作成した問題がセットになった **Reading Together** という教材が用意されていたので、筆者は積極的に利用した。レベルは **starter** から **stage 3** にまで渡っていた。**stage 2** まではページ数も多くないため、授業内でテキストを配布し、その時間で問題を解く形にした。作成された問題は内容読解から、テーマに関するライティングなど多岐にわたるもので、その中から抜粋するようになっていた。習熟度別のクラスではないので、このような形式の教材を用いると、定期試験を経ずに学生個々の学力が測ることができた。

テキストが **stage 3** になると、分量、使用英語共に難易度が上がるので、授業の前週にテキストを配布して、自宅での読書を前提とした。授業では主に内容読解とライティングを行った。その際、英語の難易度と共に内容自体も登場人物の心情などを読み取る必要があるものが多くなっていった。それらの本についての **Book Report** から、細かいが、重要な箇所などが読み取れていない学生が少なくないことが分かった。後日授業で、学生の記憶が鮮明なうちに解説を行ったが、一定レ

ベル以上の多読図書になると解説が必要であることも分かった。

学生が個別で読書しているものでも、**Book Report** により、物語の場合、話の筋が追えていない、または難解箇所を曖昧に読み飛ばしたせい加ぼんやりとした理解しかできていないことも確認できた。当然ながら、その場合は学生にとって、楽しい読書体験とはなっていないことが多かった。そのため、**Book Report** に文中の難解な文を書き出す項目を加え、説明を書いて返却していたが、その項目を利用する学生は少数であった。クラス全員が同一のテキストを読む、**Reading Together** のような教材であれば、多読でありながら、教員が学生にとって難解と思われる箇所を説明することはできた。また多読授業ではライティング等の課題を積極的に取り入れると共に、学生同士での話し合いを促し、その上でライティングに取り掛かる、という形をとることが多かった。同じ本を読んだ人と話し合うことによって、様々な視点が入るため、内容も一面的なものではなくなり、また話し合うことで、読む楽しさを感じていくのが見えていった。

#### 多読教材を用いた授業の一可能性

この多読授業は関西大学でも一年生対象であったため、二年生対象の授業で、できうる限り多くの英文を多読に近い要領で読み、内容読解を充実させ、さらに多読授業で頻繁に取り入れる事ができた、学生からの意見の発信が行えることはできないかと考えた。授業用テキストは読み物よりも設問が多かったり、読み物が充実していても、難易度が高すぎたりで、ある程度の量を個人で読み、読むスピードを上げると共に、授業では内容の確認と共に、難解な文法箇所の説明、そして課題をするのに使いやすいものが見つけられなかった。精読中心では進むページ数が少なく、また第一言語での調査ではあるが、精読では発音の改善は見られるものの、内容読解では改善は見られない、という結果も出ている。<sup>4</sup>そのため、関西大学での **Reading Together** が大きなヒントとなり、特定の多読用図書をテキストとして指定すれば、上記の事が解決できるのではないかと考えた。

<sup>4</sup> Stephen Krashen, *Free Voluntary Reading*, Santa Barbara: Libraries Unlimited, 2011, pp.62-63.

多読教材は出版社、ジャンルが多数あるが、中でも Oxford University Press の Bookworms series は巻末の読解問題が種類に富み、非常に使い易い。難易度が学生のレベルに対し、容易なものを自分で選び、大量に読む多読であれば、難易度を低めに設定すべきだが、授業内で用いるテキストは限定され、金額も上限を設けられるために多読図書でも数冊しか使用できない。そこでレベルは大半の一年生の学生にとって、辞書をあまり使わなくてもよいレベルのものを一冊と、半期の授業後は読書に慣れていることを考慮し、一つレベルを上げたもの、の計二冊を基本として用いた。二年生の学生を対象とした授業では、一年生での英語の授業からの継続という点を踏まえて、難易度のレベルを上げたものをやはり二冊使用した。また一定量のページ数のものを一気に読んで把握することに慣れてもらうため、前半は一話が一週程度で完結する短編集で、後半に長編を用いることが多かった。

毎週の範囲はシラバスで通知し、読んできていることを前提に授業を行なった。学期半ばで一冊分を終えることにしているので、テキストのレベルによって、ページ数、章数は異なるが、大体 5-6 回の授業で読み終わる形になった。Oxford Bookworms series の場合、巻末の内容読解問題が大抵章ごとに出されているため、一回の授業で進む分量の目安にし易い。毎回の授業進行は指定範囲についての設問と解答、前週に指名された学生によるあらすじの紹介、難解箇所和訳、最後に当日与えられたテーマについての英作文で構成される。訳読に慣れている学生が多いため、当初は一回に進める分量の多さに驚き、怯むので、内容を把握することが主眼であることを強調しなければならない。訳読にのみ集中するあまり、大量のページについていけず、脱落してしまう学生が出るため、授業内で取り上げる難解箇所以外は試験で訳を問われることはない、ということを知らせなければならない。

多読図書巻末の内容読解問題を授業冒頭に出題することも可能だが、Bookworms の場合、インターネット上で Oxford University Press に教員として登録すれば解答を閲覧でき、解答を入手できるため、学生の中には解答を入手していたものがいた。そのため、巻末の問題を参考に問題を作成するのがよく、できれば分かりにくい箇所を理解することに結びつく問いを含めるとよいだろう。問題数

は一授業で大体 8 問程度で納めた。レベルが高いものは前週に問題を紹介し、予習する余裕を与えると、授業時間内での解答にそれほど時間をかける必要がない。前もって問題が分かって入れば、学生間で解答の共有を行う者が出てくるが、むしろ話し合うことで理解が深まっていくことが多いので勧めたい。

多読授業を行っていた時、各自が読んだ本について、英語での要約をする課題はあったが、Book Report での短い全体要約以外での日本語要約を行なったことはなかった。しかし、二冊の多読教材を用いての授業をした当初、授業後に内容や筋についての質問が複数来ることが頻繁にあった。一学期で二冊という量であるため、内容を理解しつつ読み進めていかなければ、筋を追えず、途中で諦めてしまうものが出てきかねないため、あらすじの確認を毎回の授業で行うべきことがわかった。そこで内容確認のために日本語で指定範囲の要約を課題として順番に課すことを取り入れた。要約量は難易度にもよるが、全員が当たるように 1 ページから 2 ページ分を割り当て、レベルが高いものになると、一冊終了までに二度当たるものも出てきた。要約は字数を指定しなければ、要約に慣れていない学生は全訳をすることが往々にしてあるため、200 字程の要約用の用紙を用意した。毎回授業冒頭に回収し、学生が設問を解いている間に内容を確認し、訂正、付け加えをする箇所を確認して、必要に応じて修正したものを設問の解答後に紹介する。これによってクラス全体に向けての内容確認と共に、要約を行なった学生を基準として、クラスの理解度についての確認もできる。粗筋確認終了直後、範囲内での英文表現で分かりにくい箇所の質問を受け付けると、大抵内容理解に必要な箇所についての質問が来ることが多いので、その箇所の説明とともに、周辺の筋の説明へと繋げることができる。それでも十分な理解を教室全体がしているとはいえないので、改良が必要である。

次に内容または英文法の点で難解箇所和訳を行う。こちらもレベルが高いものは前週に和訳を聞く場所を指定しておく。特殊な表現はもちろん、構文として注意が必要なものの、学生が間違え易いものを主に取り上げる。和訳は学生を当て、必要な時は訂正を行う。テキストの難易度によるが、ここまでで大体授業の半分強の時間を費やす。

残りの時間は学生にペアを組ませ、授業範囲内容についての自由英作文やプレゼンター

ションを行う。過去には前半テキストではプレゼンテーションを行い、後半テキストは難易度が上がることもあり自由英作文を行った。ライティングは読んだ本からの語彙を反映するため、多読の有効性が如実にあらわれる。<sup>5</sup>課題はどちらの場合も教師が授業範囲内容に基づいて、学生の考え、経験を問うものになる。作品についての意見を述べる場合は必ず、根拠をあげるよう促し、論理的展開の指導とともに、テキストをもう一度しっかりと読む機会とした。定期試験は二回行い、中間試験では1冊目について、期末試験では2冊目についての試験を行なった。内容は授業内で行なった内容読解の問題に新たな問題を加えたものと、授業内で説明した難解箇所との和訳、そして試験対象の作品についてのライティング課題で基本的に構成されたものにした。

以下に過去使用し、作品テーマ、内容が筆者にとって授業進行がしやすかった具体的なテキストを用いての例を紹介する。

Stage 3での短編集と長編の組み合わせ：*A Cup of Kindness: Stories from Scotland*と*Frankenstein*。

*A Cup of Kindness*は短編5編で構成されており、7週目にはこの作品全体についての中間試験、翌8週目には次の長編に取り掛かることができた。第二次世界大戦でのユダヤ人収容所で家族を失い、イギリスに移住してきた男性と再婚した妻についての物語である一作目の“Pegion”では読解問題ではWho used Ella and Jan’s bedroom?といった、読んでいれば機械的に解答が見つかる問題を中心に出題した。難解箇所としては、過去形と過去完了形での時制の違いについての理解を必要、“He looked at the little bowl of milk, and imagined that the pigeon had taken some.”<sup>6</sup>といった文法の確認ができるものを選んだ。これは戦争での過酷な経験をした人物の物語、ということから発表、ライティングの課題には“What does the dove mean for Jan?”という問いを投げかけた。

*Frankenstein*は有名ではあるものの、実際

の内容を知らない学生が多く、時代背景などを説明する必要がある作品である。この作品でも導入と各語り手の語りによって、大まかに5つに分けられており、15週目を期末試験にする場合、14週目は疑問点などの復習に当てることが可能である。難解箇所は“I could not understand why men who knew all about good and evil could hate and kill each other.”<sup>7</sup>といったthe monsterの問いかけなどが中心になった。ライティングの課題はthe monsterが被る苦難を中心にし、“Do you think knowledge makes people unhappy as the monster said?”といったような問いかけで、the monsterの苦悩から、現実の自分に引きつけて意見を書くことを求めるものになった。

Stage 4の長編の場合：*A Tale of Two Cities*。

Stage 3または一つ上のstage 5との組み合わせも可能である。フランス革命を扱ったこの作品は13章で構成されているので、毎週2章、7-10ページ程の予習の割り当てで進行した。作品の内容上、フランス革命についての大きな説明と時代背景、また当時の制度などを簡単に説明する必要がある。“[ ] did the Marquis of Evremonde wait for?”といった、巻末の内容読解問題を参考に、疑問文の疑問詞と答えを問う問題を織り交ぜて内容を問うた。このような長編作品では人物関係が曖昧な把握になっている学生がいることが、学生の提出する要約で分かるので、要所要所で人物関係を整理して説明する必要があることがわかった。難解箇所では“The love in Kucie’s eyes as she looked at her husband warmed Darney’s heart.”<sup>8</sup>といった、学生がそれほど慣れていないであろう構文を中心に説明した。ライティングの課題では革命という異常事態の人間への影響を問うものを中心になった。最後の問いでは愛する女性のために自らの命を投げ出す人物についての、“Why do you think Sydney Carton sacrificed himself?”というものであった。読

<sup>5</sup> Stephen Krashen, *The Power of Reading: Insights from the Research*, Portsmouth: Heinemann, 2004, pp.132-133.

<sup>6</sup> Eona Macnicol, Malcolm Laing, George Mackay Brown, Ian Rankin and Susie Maguire, retold by Jennifer Bassett, *A Cup of Kindness: Stories from Scotland*, Oxford: Oxford University Press, 2010, p.2.

<sup>7</sup> Mary Shelley, retold by Patrick Nobes, *Frankenstein*, Oxford: Oxford University Press, 1989, p.26.

<sup>8</sup> Charles Dickens, retold by Ralph Mowat, *A Tale of Two Cities*, Oxford: Oxford University Press, 1994, p.54.

み込んだ学生の中には最後のページを踏まえての内容になり、非常に説得力のあるものになった。

#### Stage 5 の長編の場合: *Do Androids Dream of Electric Sheep?*

SF 作品は近未来が舞台でありながら、人間社会、人間の本質を問うためか、男女ともに学生が比較的作品を楽しみやすいことが数種類の作品を用いて分かった。ただし、学生の混乱を防ぐため、作品の状況設定は最初に説明しておく必要がある。核戦争により生物が激減し、アンドロイドが人間に使役され、共感を重視する宗教が国教となっていることなど、読み進めていけば理解できるが、全10章を5週で、毎週13-20ページ進むことになるため、基本的な情報は前もって浸透させた上で読書にかからせる方がよいだろう。このレベルになると、読解問題では、読んでいけば機会的に解答が分かる、“What did Isidor bring to Pris?”といったものから、筋に関わり、記述されている部分をそのまま抜き出すだけでは解答とならない、“When Rick put his hands on the handles of an empathy box, why did Mercer appear?”といった問いを混ぜるようにしていった。このような問いによって、解答を述べる際に、筋の説明を補うことが可能になる。難解箇所としては次第に長文が増えてくるが、それ以外でも“Every creature which lives sometimes has to do things it doesn't believe in.”<sup>9</sup>といった、関係詞が複数用いられ、また筋でも重要な意味を持つ箇所を抜粋することが多くなった。ライティングの課題では“What does it mean that human can't see Mercerism is fake because they are not enough away?”といった、作品の中心であるアンドロイドとマーサー教について問い、作品の記述を根拠に意見を展開することを求めるものが多くなった。学生同士、積極的に話し合ってもらい、意見を合わせてライティングに取り掛かってもらうので、課題を完了して以降も作品を話題にしている学生が少なく、作品の理解につながる助けになったようだ。

#### Stage 6 の短編集と長編: *Meteor and Other Stories* と *A Passage to India*.

<sup>9</sup> Philip K. Dick, retold by Andy Hopkins and Joc Potter, *Do Androids Dream of Electric Sheep?* Oxford: Oxford University Press, 1995, p.70.

筆者は stage 6 を 2 冊用いることはなく、用いる際は stage 5 との組み合わせにした。stage 6 は Bookworms でも最上位になるため、英文、内容ともに難易度は格段に上がるが、読み終えた後の学生の達成感是非常に大きい。*Meteor and Other Stories* は 4 つの短編で構成されているので、大体 2 週で一編を読み終わる進行となった。SF 作品ではあるが、短編であり、各話で設定が異なるため、長編のように基本設定を細かく説明すると、作品の謎を明らかにしてしまうことになるため、むしろこの作品では説明を避けた。内容読解問題では巻末問題を参考にし、

“Mrs Holding said to her daughter that she could be adjusted to the life on Mars if [ ].”といったように、文の一部を作品内容に沿って自分で埋め、文を完成する、といった問題を出した。またこの作品では宇宙船の構造、銃撃戦での被害順など、構文を解釈しないと理解できない箇所が複数あるため、内容読解問題とは別に図解で示す課題なども設けた。緊迫した筋の作品を読む中で、このような問題は緊張を緩和するとともに、作品を学生同士で協力して読み込もうとする姿勢につながった。難解箇所では“And if all our women were mice, our chances of survival would not be great!”<sup>10</sup>といったように、仮定法など構文自体の難易度の高いものを中心になった。ライティングの課題では“Both the aliens and Sally wish for a harmonious, peaceful new world with aliens, but they bring the opposite reality. Are there similar situations in reality?”といった、作品と同様の例を現実世界であげてを求めるものなどになった。*A Passage to India* は統治者側であるイギリス人作家による、植民地時代のインド、特にイスラム教社会についての作品であるため、基本的な歴史、社会背景を説明する必要があった。14章を2章毎、大体14-20ページ分を読み進むことになる。最上位の難易度であり、長編、そして歴史、社会制度が複雑なため、毎回の授業最後にその週のあらすじを配布し、翌週の内容への備えとした。難解箇所では“There are different ways of evil and I prefer mine

<sup>10</sup> John Wyndham, retold by Patrick Nobes, *Meteor and Other Stories*, Oxford: Oxford University Press, 1991, p.50.

to yours.”<sup>11</sup>といった、構文だけではなく、抽象的な内容についての把握を求めるものが中心になった。ライティングの課題では“**What do you think of the reaction of the English community to Adela?**”といったように、統治者と被統治者との表面上の友好関係と、それが崩れた後の緊迫した状態について問うものが中心になった。現在の価値観では否定される対象である植民地主義がテーマであるため、学生の最初の反応は驚きと否定が主で、理解不可能な対象というものだが、次第に単なる拒否を超えた読解へとつながっていくのが見られた。

多読授業以外で、可能な限り多読に近い授業を、と多読教材を用いての授業を行なってきた。多読授業と異なり、比較的難易度が高めのあるものをテキストとすることもあり、学生は一冊読み終えた、という達成感はかなり強いようだった。また授業内でのライティング等の課題で、学生同士の話し合いを積極的に設けることで、助け合いながら作品を楽しんで読む、という姿勢が出来上がっていった。これからの課題は多読授業で上がっている、具体的な英語力、理解力の改善を数値として測り、また多読授業との比較をしていくことである。

#### 参考文献

- Dick, Philip K. (1995) retold by Andy Hopkins and Joc Potter, *Do Androids Dream of Electric Sheep?* Oxford: Oxford University Press.
- Dickens, Charles (1994) retold by Ralph Mowat, *A Tale of Two Cities*, Oxford: Oxford University Press.
- Forster, E. M. (2009) retold by Clare West, *A Passage to India*, Oxford: Oxford University Press.
- Krashen, Stephen (2011) *Free Voluntary Reading*, Santa Barbara: Libraries Unlimited.
- \_\_\_\_\_ (2004) *The Power of Reading: Insights from the Research*, Portsmouth: Heinemann.

Shelley, Mary (1989) retold by Patrick Nobes, *Frankenstein*, Oxford: Oxford University Press.

Takase, Atsuko and Kyoko Otsuki (2011) “The Impact of Extensive Reading on Remedial Students,” 『教養・外国語教育センター紀要』 2巻1号。

Wyndham, John (1991) retold by Patrick Nobes, *Meteor and Other Stories*, Oxford: Oxford University Press.

デイ、リチャード・R、ジュリアン・バンフォード (2007) 『多読で学ぶ英語—楽しいリーディングへの招待』 (荒牧和子、池田庸子、上岡サト子、川畑彰、北風文子、内藤満、福屋利信、松本真治、吉村俊子、渡邊慶子訳) 東京: 松柏社。

---

<sup>11</sup> E. M. Forster, retold by Clare West, *A Passage to India*, Oxford: Oxford University Press, 2009, p.72.